

日本哲学とは何か

——その定義と範囲を再考する試み——

ブレット・デービス

日本哲学とは何か。私は最近、『オックスフォード日本哲学手引書』(*The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*)⁽¹⁾の編集者として、この意外にも複雑な質問に面していた。日本哲学の定義付けにより、その範囲も当然変わってくるのである。日本哲学を網羅すべき手引書を計画する際、明治以前の仏教や儒学の理論的な言説を「哲学」とするのか、それとも「思想」あるいは「宗教」として扱うのか、という難解な問題を避けることはできない。以下で説明するように、大抵の欧米人学者と日本人学者の間には、その点にかんしての相違がみられる。

現在、欧米において、「哲学」は果たして西洋の伝統の専有物であるのかどうか、ということが再び議論されている。「哲学」は、「芸術」または「宗教」と同様に、何らかの形でどの文化にもみられる、人間の普遍的な営みであるのか、それとも「印象派」や「プロテスタンティズム」のような、西洋文化が生み出した特殊なものなのであるのか、言い換えると「哲学」は、何らかの形でどの文化にもみられる「踊り」のようなものなのか、それとも特定の文化圏において形成された「バレエ」のような特殊なものなのであるのか⁽²⁾。日本にはバレエを輸入する必要はあったが、踊りは元から存在していた。日本には何らかの「哲学」が元来存在していたのであろうか、それともバレエのように西洋から輸入する必要があったのであろうか。日本人学者はなぜ「宗教」や「芸術」は普遍的概念としているのに、

「哲学」は西洋特有なものとして把握してきたのであろうか(3)。

私は、このような問いに面しながら、『日本哲学手引書』を計画していた。けつきよく、近年出版された『日本哲学原典翻訳集』(*Japanese Philosophy: A Sourcebook*)(4)と同様に、私は、明治以降の「近代日本哲学」のみでなくそれ以前の、日本では「日本思想史」として扱われている内容も、『手引書』で取り扱うことにした。その『手引書』の長い序論において、私は、「日本哲学とは何か」という質問に含まれている諸問題をできるだけ詳しく取り上げてみた(5)。この小論では、いくつかの要点や暫定的な結論のみを述べたいと思う。

一 西洋独占的な哲学概念を輸入した日本

日本では、ほとんどの哲学入門書あるいは哲学入門の授業の始めにおいて、哲学とは *philosophy* (*Philosophie* など) の訳で、それは古代ギリシャに由来し、主に西洋の伝統を通じて展開されてきた知的な営みである、と説明されている。もちろん、中世以来のイスラム哲学や、明治時代からの日本哲学などもあるのだが、それらは西洋哲学から派生するものであり、西洋哲学史の支流である、と説明される。哲学とは、本来西洋哲学であり、哲学史とは、西洋哲学史(およびその支流)のことである——そういった西洋中心のみでなく「西洋独占的な哲学理解」は、未だに存在しているといえるだろう。

たしかに、「中国哲学」・「インド哲学」という表現を日本で使うこともあるのだが、近年には、これらをむしろ「中国思想」・「インド思想」と言い直して使っている学者や組織が多いようである。しかし、「思想」という言葉も元々は翻訳語である、ということ忘れてはならない。しかも、「思想」(*thought, pensee* など)の意味合いには、それは

「哲学」より範囲が広いということのみでなく、哲学に比べ方法的な厳格性のレベルが低い、というニュアンスも含まれている、ということも注意すべきだと思われる。つまり、厳密な「哲学」に比べると、「思想」という概念には、厳格な思考方法に基づいていない、という降格的な批評が含意されているのである。したがって、西洋の伝統の他に「思想」はあるが「哲学」はない、という主張は、単なる事実の叙述ではなく、価値判断を含む批判的な主張であるといわざるをえない。

「宗教」(religion など)も、元々は西洋の概念であり、それは信仰に基づくもので、理性に基づく「哲学」とは区別されている。しかし、理性対信仰あるいは哲学対宗教という対立の考え方は、「アテネ」と「エルサレム」が象徴する極めて異質な二つの文化的源泉、またその合流から成り立っている西洋伝統を貫く独特な葛藤を反映しているのである。したがって、たとえば「仏法・仏道」を「仏教」として考え直したものは「宗教」であるか、それとも「哲学」または「思想」であるのか、という質問自体、西洋の概念を押し付けているのみでなく、西洋の内面的な分裂を投射しているものである(6)。

それにもかかわらず、日本では、単に「哲学」またそれにもまして、その普遍性を強調するために「純粹哲学」といわれるとき、通常は「西洋哲学」およびその支流のみが指し示されている。したがって、日本では「日本哲学」という概念は、通常「近代日本哲学」、つまり西洋から輸入した学問的方法に基づき、明治以降の日本人哲学者がもたらした独自の理論や議論のことを意味するのである(7)。要するに、明治時代の日本の学者たちは、西洋哲学と共に西洋中心あるいは西洋独占的な哲学理解を輸入した。仏教と儒学の理論的な言説を「哲学」として解釈した井上円了や井上哲次郎のような学者もいたのだが、結局のところ、中江兆民の「わが日本、古より今に至るまで哲学なし」(8)という意見が主流となったのである。

二 「日本哲学」と「日本思想」の区別の問題

たしかに、兆民が促進する、啓蒙主義の政治哲学や唯物論の形而上学は、当然日本にはなく、近代西洋的な学問的方法論に基づいた論述もなかったのである。それらを輸入し、綿密に学び、また批判的にも考察する意義はあつたに違いない。しかし、日本には哲学が從來全くなかった、と断言してしまうことは、西洋哲学の方法論のみでなく、その文化的な特殊性が蓄藏されている内容までも丸ごと取り入れてしまうことと同時に、従来の日本における真・善・美あるいは神・禅・気などについての考察・議論を哲学の分野から排除し、「日本思想史」という「地域研究」へと隔離してしまうことなのである。結果的に、従来の日本哲学の存在を否認するということは、将来の日本哲学の身を乏しくすることにつながるのではないかと思われる。

日本人が西洋哲学を取り入れた時代の、欧米における学問的な事情をより批判的に考慮すべきであろう。のちに説明するように、西洋独占的な哲学概念は十八世紀末の産物である。皮肉にも、もし日本人が十九世紀末ではなく、その百年前またはその百年後に西洋の哲学概念を取り入れていたのであれば、おそらくインド、中国、日本などにも哲学は元からあつた、という考え方になつていたと推測できる。なぜなら、十八世紀末までのヨーロッパでは、それが主流の見解であり、また、現在の欧米においても、その見解が戻りつつあるからである。つまり、日本人学者が西洋独占的な哲学理解をもつようになり、日本の伝統的な仏教や儒学の理論的な言説を、「哲学」ではなく「思想」に分類・降格させた理由には、歴史的な偶然性があつた、といえる。なぜなら、百年前でも百年後でもなく、西洋独占的な哲学理解が西洋において一番支配的になつていたであろうその時代に、日本人が西洋哲学に出会つたからである。

現在の欧米にみられる西洋独占的な哲学理解を脱する傾向の証拠のひとつは、近年欧米において出版された「日本哲学」(Japanese philosophy, japanische Philosophie など)を表題としている多くの書物が、「近代日本哲学」のみでなく、日本において「(前近代) 日本思想史」として分類されている言説も取り扱っていることである(9)。

これに関連している考慮すべき事情がもうひとつある。それは、中国と韓国の学者たちが、西周の翻訳語「哲学」を取り入れながらも、その西洋独占的な意味合いを拒否した、ということである。中国でも韓国でも、「哲学」(*zhéxué*, *cheolhak*)の範囲は、伝統的な仏教や儒学の理論的な言説を含むのである。また、中国や韓国と同様に、インドにおいても、伝統的な言説は「哲学」と見なされ、諸大学における哲学科のなかで勉強・研究されているのである。一方、日本では、哲学を専攻とする学生たちは通常専ら西洋哲学のみを学んでいるのである。

三 「汝自身を知れ」と「己事究明」の課題および「二階建て」の問題

哲学を勉強、あるいは研究する多くの日本の学生や学者は、ソクラテス以降の西洋哲学史を詳しく学びながらも、「汝自身を知れ」という哲学の核心的な課題には十分取り組んでいないと、もしソクラテスが生きていたら、彼にそう批判されるのかもしれない。じつは、その戒めはソクラテスから学ぶ必要はない。似たような教えが、たとえば日本の禅の伝統にあるからである。道元禪師は「仏道をならふといふは、自己をならふ也」といい、また大燈国師によれば禅とは「己事究明」のことである。

もちろん、ソクラテスと禅の自己を探究する仕方は同じではない。しかし、禅の教えを「宗教」あるいは「思想」として分類し、その哲学的な意義を考慮しなくても良いのであろうか。西洋哲学者たちが、「宗教家」でもあるアウ

グステイヌスの『告白』を読み、その哲学的な意義を究明するように、日本の哲学者たちは最澄や空海、道元や親鸞、伊藤仁斎や本居宣長の言説の哲学的な意義を究明すべきだと思われる。

周知のように、一九三六年から五年間日本に滞在したカール・レーヴィットは、日本の学者たちはまるで「二階建ての家」に住んでいるようであり、その一階で彼らは日本的な感情や考え方をもちながらも、二階ではプラトンからハイデガーまでのヨーロッパの精神史を研究している、という批判を述べた⁽¹⁰⁾。二〇一八年に出版された『日本哲学に取り組む試み』(Engaging Japanese Philosophy)でトマス・カスリスは、五百ページを費やして千五百年にわたる日本の「哲学史」を解説した後、近現代の日本哲学者たちは「自らの哲学的な伝統を否認し」、自分自身の知的な植民地化に参与している、と非難した⁽¹¹⁾。

しかし、近代日本における西洋化はただの植民地化ではない。明治以降の知識人たちは、きわめて真剣に民主主義や近代科学と共に西洋哲学に取り組み、現在に至るまでの百五十年を通じて、いわば「二階建ての家」に階段を設けてきたともいえる。また、現代日本人にとつては、「二階」においての勉強・研究のみでなく、「一階」においての日常生活もかなり「日本風西洋化」されている。ゆえに、現代日本人が哲学的な「己事究明」を行うためには、いわゆる「日本思想史」と共に「西洋哲学史」をも勉強する必要があると考えられる。

なお、西洋の「哲学」を綿密に研究しながらも、日本および中国やインドにおける「思想」と「宗教」も重視してきた日本人哲学者たちもいる、ということを忘れてはならない。レーヴィットは後に、「二階建て」の問題を逃れた例外の日本の哲学者として、西田幾多郎を認めた⁽¹²⁾。カスリスは、日本の伝統も踏まえながら独自の思索を展開した近代日本哲学者として、西田幾多郎と和辻哲郎を詳しく取り上げている。もちろん西田と和辻以外にも、京都学派の流れには田辺元や西谷啓治、また東京には大森莊蔵や坂部恵のような独自の哲学を展開してきた注目すべき近代

日本哲学者は実に多数いる。

今後、日本における哲学界はどのように発展してゆくのだろうか。それは、世界および世界史の把握と密着していると思われる。いわゆる「グローバル化」は、西洋化あるいはアメリカ化と合成され続いてゆくのだろうか。それとも今後は、中国を中心とする諸国と、アメリカを中心とする諸国、というふたつの文化圏の間の分裂が深まってゆくのだろうか。いずれの場合にせよ、日本文化は敗戦以来の流れのまま、徐々にアメリカ化（しかも日本語は徐々に英語化）し続けるのだろうか。そうなれば、日本における哲学はどうなるのだろうか。これからの日本では、ドイツ哲学やフランス哲学よりも、英米分析哲学のほうが主流となつてゆくのだろうか。

しかし、もしアメリカの最新の学問的な思潮を取り入れるならば、そのひとつは、逆説的にも、西洋中心主義ではなく脱西洋中心主義なのである。今日、アメリカの政権はその反対の極端に走っているのだが、多くの学者は従来の西洋中心的な学界に対して批判的な姿勢をとっている。哲学者たちはやや遅れてはいるのだが、彼らもようやく西洋独占的な哲学理解を脱する兆しを見せはじめている。

四 十八世紀末における西洋独占的な哲学理解の誕生

現代の流れを理解するためには、遡つていわば「哲学史の歴史」を概観する必要がある。じつは、西洋哲学以外には哲学はない、という見解は、たつた二百年程前につくられたものである。しかも、それは合理的な根拠というよりは、自民族中心主義および人種差別的イデオロギーに基づいたものである。周知のように、カントは、「人種」という概念に科学的な根拠をつけようとした最初の哲学者である。そして、故郷のケーニヒスベルクからほど出たこ

とのないカントによると、「ヨーロッパの白人」のみが哲学をする能力を有しているのである⁽¹³⁾。

カント以前は、哲学史はギリシヤではなく「東洋」(Orient)に始まる、という見解が主流だったのである。たとえば、十八世紀半ばにヨハン・ヤコブ・ブルッカーが執筆した、近代ヨーロッパにおいての最初の網羅的な哲学史では、エジプト、バビロニア、ペルシア、インド、中国、日本などにおける知的伝統は「哲学」(Philosophie)として取り扱われている⁽¹⁴⁾。その前後に出された他の多くの哲学史も同様に、非西洋の知的伝統を「哲学」と見なしている⁽¹⁵⁾。しかし十八世紀末に、カント、およびカントに影響を与えたクリストフ・マイナースという思想家が展開した人種差別的な理論を踏まえたカント派の哲学史家、すなわちヴィルヘルム・ゴットリープ・テンネマンによって、近代において初めて非西洋の伝統を完全に排除した哲学史が公表されたのである⁽¹⁶⁾。その西洋独占的な哲学史理解はけつきよく定着し、百年後日本にも輸出されるようになったのである。

五 現在における西洋独占的な哲学理解を脱する要求

しかし、二十世紀を通じて多文化主義や脱植民地運動(文化的な脱植民地運動も含む)が盛んになり、また非西洋の諸文化についての偏見が解かれ理解が深まるとともに、西洋独占的な哲学理解を批判する哲学者も徐々に増えてきた。現在アメリカでは、「哲学」の範囲をめぐる猛烈な論争が始まっているようである。

その論争に火をつけたのは二〇一六年に新聞ニューヨークタイムズに載せられた、「哲学は多様化しないのならば、その実相を表す名を付けよ」(“If Philosophy Won’t Diversity, Let’s Call It What It Really Is”)という記事である。執筆者は、ジェイ・ガーフィールドとブライアン・ヴァン・ノーデンである。二人とも分析哲学および西洋哲学史を研

究したうえで、ガーフィールドはインド・チベット仏教の哲学、ヴァン・ノールデンは中国哲学の専門家となった一流の哲学者たちである。アメリカの諸大学における哲学科の閉鎖性を非難し、仏教哲学や中国哲学またその他の非西洋の哲学伝統を、西洋哲学と共に教えるべきだ、と訴えている記事である。要点は次の通りである。

「アメリカ諸大学における哲学科のほとんどは、ヨーロッパまた英語圏に由来する哲学についての授業しか提供していない。」「哲学界全体は未だに断固として西洋中心的であり」、「西洋の男性の業績を称賛するための寺院であるかのような印象」を与えてもしかたがないのである。「我々の提案は簡単である。その印象に違和感のない人は、その事実を率直に認め、弁論すればよいのである。」「西洋哲学についての授業しか提供しない学科は、『哲学科』ではなく『欧米哲学科』と名称を変えるべきなのである」、と(17)。

この提案は皮肉な趣旨をもつ。というのも、哲学を、普遍的な真理を目指す学問から、特殊な文化に限られる「地域研究」へと制限するということは、哲学の営みの自己理解が根本的に変えられる、ということになるからである。つまり、哲学が哲学ではなくなる、ということである。しかも、従来のように、中国哲学などを「東洋文化研究科」などという学科に制限するということも、それらは本当の哲学、すなわち普遍的な真理を目指す学問ではない、という降格が含意されている、といわざるをえないのである。その不平等な扱いを指摘しているのである。

この記事は驚くほど多くの反応を呼び起こした。賛成の意見も少なくなかったのだが、意外にも熱烈な批難の声も多数あがった。その批判的な反応において目立ったのは、頑固たる西洋独占的な哲学理解のみでなく、他の哲学的な伝統についての恐るべき無知さであった。たとえば、孔子には幾つかの面白い考えがあったのだろうが、彼以来の中国では解説や議論の伝統はなかった、というとんでもない断言をした人もいた。また、あたかも西洋文化のみが文化の限界を超えようとし、普遍的な真理を目指してきた、という無知にもとづく傲慢（または傲慢にもとづく無知）を

明らかにする偏見を、平気で公の場で発言する哲学博士たちが未だにいる、という英語圏哲学界の恥ずかしい事実が浮上したのである。これは決して英米分析哲学者たちに限られず、欧米における大陸哲学に携わる人々の間にも浸透している偏見なのである(18)。

二〇一七年にヴァン・ノードンがガーフィールドの序文を付して『哲学を取り戻す——多文化的宣言』(*Taking Back Philosophy: A Multicultural Manifesto*)という本を出版した。その本では、批判者たちに答えながら、哲学の諸伝統の間には壁ではなく架け橋を設けること、特にトランプらの時代においてのその重要さが力説されている(19)。

六 「日本哲学」は「民族哲学」あるいは「日本人論」ではない

私は、ヴァン・ノードンとガーフィールド、および増えつつある西洋哲学者たちと同様に、哲学とは、西洋哲学の同義語ではなく、むしろ西洋哲学は、多数の哲学伝統のなかのひとつである、と考えている。いわゆる「純粹哲学」は存在しない。すべての哲学の営みには、何らかの文化的背景がある。しかし、その背景は、ただの「観点」、あるいは「立場」というよりも、それは「出発点」である、と私は考えている。もしある文化的背景がある理論の単なる観点、あるいは立場であるのなら、それは民族の世界観を表現するいわゆる「民族哲学」(*ethnophilosophy*)にとどまる(20)。それに対して、たとえば西洋哲学における言説は、西洋の伝統やその諸文化・言語から出発するのだが、その目的は、ただ西洋人の世界観を表すことではなく、普遍的な真理を把握することなのである。

したがって、日本哲学は、いわゆる「日本人論」に属するものではないのである(21)。日本哲学は、ただ日本民族の特徴や世界観を表そうとしている試みではなく、日本の伝統・言語・文化を主に出発点として普遍的な真理を把握

しようとしている学問なのである。ドイツ哲学やイタリア哲学、また中国哲学や南米哲学についても同じようなことがいえるのである。

ある伝統・文化・言語的な背景を哲学的な出発点とするためには、その伝統・文化・言語に振り返り批判的にも考察することが求められる。それが、その哲学者自身の背景であるならば、あまりにも近いからこそ、批判的な距離を獲得し、保つことは難しい作業である。そのためには、他の伝統・文化・言語を学ぶことが重要な役割を果たす。また、他の伝統・文化・言語を背景とする哲学者との対話を行うことも、欠かせない役割を果たせると考えられる²²。

七 「日本哲学」は主に「日本における哲学」の部分集合である

どの国（あるいは文化・言語圏）においても、様々な哲学者がいることは望ましい、と考えられる。自国の伝統・文化・言語に由来する発想を批判的・創造的に展開する哲学者も、他国の伝統・文化・言語に由来する発想を批判的・創造的に展開する哲学者も、両方が揃えばより豊かな哲学的な対話ができ、互いの特徴を比較し、共にそれらの利点と弱点を考察することができるのである。

「日本哲学」と「日本における哲学」を便宜上区別したいと思う。私の理解では、「日本哲学」は主に「日本における哲学」の部分集合である。「日本哲学」は日本の伝統・文化・言語に由来する発想を批判的にも考察し、その発想を創造的にも展開する学問である。そのように「日本哲学」を定義すればよいと私は考える。

しかし、そのように定義すると、現在日本で行われている哲学のほとんどは日本哲学ではない、といわざるをえない。たとえば、ヘーゲルの哲学についての研究は、偶々それが日本において、日本人によって、そして日本語をもつ

て行われているからといって、その研究はすなわち日本哲学に属している、とは普通考えないだろう。ただし、もしそのヘーゲル研究が、日本の文化的・言語的な文脈において行われているということが考慮され、明らかな「日本的な」解釈、あるいは批判をもつて展開しているのであれば、その研究はドイツ哲学と日本哲学の両方への貢献であると十分考えられる。

もちろん、この「日本における哲学」と「日本哲学」の区別はあくまで便宜上のものであり、曖昧な場合が多いだろう。しかし、日本におけるすべての哲学者が日本哲学に携わっているわけではけっしてないので、やはり「日本における哲学」は「日本哲学」より広い範囲を示すのである。さらに、ある哲学者は日本に住んでいるから日本哲学を専門にする必要がある、というわけでもなく、ある哲学者は日本に住んでいないから日本哲学に携わることができない、というわけでもないだろう。日本に住んでいる人が、英米分析哲学に携わることが十分可能であるのと同様に、他国に住んでいる人が、日本哲学に携わることも十分可能であるので、「日本哲学」はあくまで主に、「日本における哲学」の部分集合である、というべきなのだろう。

より広くいえば、日本哲学は世界哲学の部分集合である、というべきなのかもしれない。しかし、「世界哲学」は如何なる意味をもつのであろうか。

八 「世界哲学」という対話の場所における日本哲学

最近、西洋哲学に限らず、哲学の諸伝統を扱う英文の本は「世界哲学」(world philosophy)という表現を使っている⁽²³⁾。その表現はどのように理解すればよいのだろうか。どの哲学も、哲学として、全世界的普遍性を目指して

いる、といえるだろう。しかし同時に、どの哲学も、特殊な伝統・文化・言語、あるいは限られた諸伝統・文化・言語を出発点とすることによって展開されているのである⁽²⁴⁾。文化的な色合いのない「純粹哲学」、あるいは文化的な特殊性を完全に脱し切った「普遍哲学」がないのなら、「世界哲学」はどのような意味をもつことがあり得るのだろうか。

ひとつの可能性は、「世界音楽」(world music)という表現の使い方と同様に、西洋哲学以外の哲学諸伝統の総称として「世界哲学」という表現を理解することである。しかし、西洋哲学も当然世界におけるひとつの伝統であるがゆえに、それが「世界哲学」の範囲に含まれないことは妥当ではないと思われる。たしかに、「世界音楽」などという表現の場合、「世界」は「民族的」(ethnic)という意味合いをもつときがある。日本では、「エスニック料理」という表現はいわゆる「和洋中」以外の料理をあらわすのだが、じつは洋食・和食・中華料理のそれぞれは元来民族的なものである、ということ忘れてはならない。私は昔、アジアの諸国をまわってその地の伝統的な踊りを観た後、久しぶりにヨーロッパに行きドイツでバレエを観た経験がある。その時に気づいたのは、なるほどバレエもきわめて民族的な踊りであるということである。西洋中心的にグローバル化している今日の世界においては、西洋文化の産物はそのまま「国際的」であり、他文化の産物は「民族的」である、とわれわれは考えがちではあるが、その考え方は、文化的帝国主義・植民地主義の影響であるといわざるをえない。バレエが元来民族的な踊りであるのと同様に、西洋哲学は一群の諸文化から発祥した、ひとつの哲学伝統であるということ忘れてはならない。

もうひとつの「世界哲学」を理解する可能性は、グローバル化が文化的な一様化になってゆくとすれば、ひとつの、たとえばアメリカの文化・言語が、そのまま世界の文化・言語になってしまふと共に、アメリカ哲学がそのまま世界哲学になってしまふ、ということである。「世界哲学」という表現を使う人々のなかには誰もこの趣旨をもつ人はい

ないにしろ、国際的な哲学界において、実際そうなりつつある、と思われても仕方がない光景もみられる。特に英米分析哲学に携わる世界中の人々は、その伝統・文化・言語的制限について十分注意を払っていないのではないかと思われる。

言語の一樣化にかんしては、たとえば、二〇一八年八月北京で行われた「世界哲学会」では、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、およびアラビア語も公用語に含まれていたのだが、ほとんどの発表は、英語もしくは現地の中国語で行われたのである。二日間にわたる日本哲学についての発表会がそこにあつたのだが、すべて英語で行われた。日本語が公用語として認められていないのは、日本人哲学者たちが働きかけていないからだろうか。今回の世界哲学会では、なんとドイツ語が公用語から外される、という話しも耳にしている。世界においては、二週間ごとに一つの言語が消滅している、といわれているが、哲学界においても、諸文化の結晶でもある、また哲学的思惟の源泉ともなる諸言語が減少されつつあるのは事実である。

一方、文化・言語・哲学的な一樣化を拒否し、多文化・多言語に基づく哲学的な対話を促進する哲学者が少なからず存在するのも事実であろう。「哲学」の意味についても、多元的な対話があるべきだと考えられる。デイルタイの弟子ゲオルグ・ミツシュは、半世紀以上も前に、「ギリシャより発祥した哲学は「本来」のものであり、またヨーロッパ的な哲学の仕方は論理的に必然的な仕方であるという前提は、狭い視野に基づく種類の自信を露にするものだ」、とのべたのである⁽²⁵⁾。『哲学の本質』においてデイルタイ自身は、西洋哲学史を通覧して、「哲学あるいは哲学的という語は、時と場所によってたくさんの意味がある」と述べ、結局「諸哲学はあるが、唯一の哲学はない」(26) gibt dann Philosophien, aber keine Philosophie」という結論を導いたのである⁽²⁶⁾。他の哲学的な諸伝統を視野に入れるのならば、ますますそういわざるをえない。したがって、「世界の諸哲学」はあるが、唯一の「世界哲学」はない、

という必要はあるのかもしれない⁽²⁷⁾。ただし、促進すべき多元主義が、哲学的対話を塞ぐ悪質な相対主義に変貌しないためには、その「世界の諸哲学」には、やはり共通する「世界」がある、ということを忘れてはならない。それにしても、その共通の「世界」は、どのように考えればよいのだろうか。

「世界哲学」という表現を理解するためには、もうひとつの可能性がある。それは「世界哲学」を、ある哲学の立場でもなければ、ある伝統・文化・言語によって限定される分野でもない、むしろ諸伝統・文化・言語を出発点とする諸哲学が互いに出会い、対話を行う「場所」である、と理解することである。「世界哲学」は「多元的な哲学対話の場所」であり、しかもその場所は予め特定の伝統・文化・言語によって規定されたものではなく、対話自身によって対話の場所が形成されてゆくのである。

日本哲学は、その対話において、また、その対話への貢献として行われるべきである、と私は考えている。ならば、「日本哲学」とは、「(主に) 日本における哲学の部分集合」であると同時に、より重要な意味では、対話の場所としての「世界哲学」における、日本の伝統・文化・言語を主に出発点とする学問である、といっても良いのではないだろうか。

注

- (一) *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, edited by Bret W. Davis (New York: Oxford University Press, 2020).
- (二) 踊りとバレーの比較について、Justin E. H. Smith, *The Philosopher: A History in Six Types* (Princeton: Princeton University Press, 2016), pp. 62-63 を参照。

(三) じつは狭義の「宗教」と「芸術」も、西洋特有なものであるとして次のように理解する研究者もいる。「宗教」(religion) は元々キリスト教を中心とする近代的な概念である。元来キリスト教は、唯一の真なる「宗教」であり、他の信仰は「邪教」であると考えられた。十九世紀末に多数の「世界宗教」という概念が設けられ、「仏教」(Buddhism) などが「宗教」であると認められるようになったのだが、「宗教」また「世

界宗教」は未だにキリスト教を模範とする西洋中心的な意味合いが残っている概念である」と。Tomoko Masuzawa, *The Invention of World Religions: Or, How European Universalism Was Preserved in the Language of Pluralism* (Chicago: The University of Chicago Press, 2005) を参照。日本における訳語としての「宗教」という概念の生成について、Jason Ananda Josephson, *The Invention of Religion in Japan* (Chicago: The University of Chicago Press, 2012) を参照。また「芸術」すなわち「アート」(art) も元々西洋近代的な概念であり、それをあらゆる時代や文化の作物に無批判的に当てはめることは差し支えると考えられる」と。Larry Shiner, *The Invention of Art: A Cultural History* (Chicago: The University of Chicago Press, 2003) を参照。

(4) *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, edited by James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo (Honolulu: University of Hawaii Press, 2011).

(5) Bret W. Davis, “What is Japanese Philosophy?” in *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, pp. 1-79. また Bret W. Davis, “Beyond Philosophical Euromonopolism: Other Ways of—Not Otherwise than—Philosophy,” *Philoso-*

phy East and West 69/2 (April 2019), pp. 592-619 を参照。

(6) Bret W. Davis, “Provocative Ambivalences in Japanese Philosophy of Religion: With a Focus on Nishida and Zen,” in *Japanese Philosophy Abroad*, edited by James W. Heisig (Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture, 2004), pp. 246-274; Bret W. Davis, “Rethinking Reason, Faith, and Practice: On the Buddhist Background of the Kyoto School,” 『宗教学研究』23 (2006), pp. 1-12; Bret W. Davis, “Faith and/or/as Enlightenment: Rethinking Religion from the Perspective of Japanese Buddhism,” in *Asian Philosophies and the Idea of Religion: Paths Beyond Faith and Reason*, edited by Sonia Sikka and Ashwani Peetush (New York: Routledge, forthcoming) を参照。

(7) たとえば、古田光之生松敬三編『日本の哲学』(岩波書店、一九七二年)、常俊莊三郎編『日本哲学を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九八年)、田中久文『日本の「哲学」を読み解く』(さくま新書、二〇〇〇年)、藤田正勝とベレット・デービス編『世界のなかの日本の哲学』(昭和堂、二〇〇五年)、熊野純彦編著『日本哲学少史』(中央公論新社、二〇〇九年)、檜垣立哉『日本哲学原論序説』(人文書院、二〇一五年)、藤田

正勝『日本哲学史』(昭和堂、二〇一八年)‘また、雑誌『日本の哲学』および『日本哲学史研究』を参照。

(8) 『中江兆民全集』第十卷(岩波書店、一九八三〜一九八六年)‘一五五頁。

(9) たつねば Lydia Brüll, *Die japanische Philosophie: Eine Einführung* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1993); Gregor Paul, *Philosophie in Japan von den Anfängen bis zur Heian-Zeit. Eine kritische Untersuchung* (München: Iudicium, 1993); Peter Pörtner und Jens Heise, *Die Philosophie Japans. Von den Anfängen bis zur Gegenwart* (Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1995); H. Gene Blocker and Christopher L. Starling, *Japanese Philosophy* (New York: State University of New York Press, 2001); Leonardo Vittorio Arena, *Lo spirito del Giappone: La filosofia del Sol Levante dalle origini ai nostri giorni* (Milano: RCS Libri, 2008); *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, edited by James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo (Honolulu: University of Hawaii Press, 2011); Gereon Kopf (ed.), *Dao Companion to Japanese Buddhist Philosophy* (New York: Springer Publishing, 2019);

Bret W. Davis (ed.), *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy* (New York: Oxford University Press, 2020) ‘また雑誌 *Journal of Japanese Philosophy* と *European Journal of Japanese Philosophy* を参照。

(10) Karl Löwith, *Sämtliche Schriften* (Stuttgart: J. B. Metzler, 1981–88), Bd. 2, S. 537. ノーヴィットの批判について『西谷啓治著作集』第八卷(創文社、一九八七年)一七九―一八二頁、大橋良介『日本のなまの、ヨーロッパ的なもの』(新潮社、一九九二年)一五二―一五七頁、大河内了義『異文化理解の原点』(法蔵館、一九九五年)二十一―二十五頁、Bret W. Davis, “Dialogue and Appropriation: The Kyoto School as Cross-Cultural Philosophy,” in *Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School*, edited by Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason Wirth (Bloomington: Indiana University Press, 2011), pp. 35-44 を参照。

(11) Thomas P. Kasulis, *Engaging Japanese Philosophy: A Short History* (Honolulu: The University of Hawai'i Press, 2017), pp. 578-579.

(12) Karl Löwith, *Sämtliche Schriften* (Stuttgart: J. B.

Metzler, 1983–86), Bd. 2, S. 560, 582.

(13) カントによる「中国人、インド人、アフリカ人、またアメリカの先住民は先天的に哲学をする能力はない」という趣旨をあらわす引用を集めるのは、Bryan W. Van Norden, *Taking Back Philosophy: A Multicultural Manifesto* (New York: Columbia University Press, 2017), pp. 21–23 を参照。『入種』にかんするカントのテキストは、そのほか『論理の二つの基礎』、Kant and the Concept of Race, edited by Jon M. Mikkelsen (Albany: State University of New York Press, 2013) を参照。

(14) Johann Jakob Brucker, *Historia critica philosophiae a mundi incunabulis ad nostrum usque aetatem deducta*, 5 Bde. (Leipzig, 1742–1744); Rolf Elberfeld, “Ansätze globaler Philosophiegeschichte: Kommentierender Überblick anhand von Textpassagen und Inhaltsverzeichnissen,” in *Philosophiegeschichte in globaler Perspektive*, herausgegeben von Rolf Elberfeld (Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2017), S. 282–284 を参照。

(15) Franz Martin Wimmer, “Unterwegs zum eurägalistischen Paradigma der Philosophiegeschichte

im 18. Jahrhundert: Barbaren, Exoten und das chinesische Ärgernis,” in *Philosophiegeschichte in globaler Perspektive*, herausgegeben von Rolf Elberfeld (Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2017) を参照。

(16) Wilhelm Tennemann, *Geschichte der Philosophie*, 11 Bde (Leipzig, 1789–1819); Peter K. J. Park, *Africa, Asia, and the History of Philosophy: Racism in the Formation of the Philosophical Canon, 1780–1830* (Albany: SUNY Press, 2013); Robert Bernasconi, “Philosophy’s Paradoxical Parochialism: The Reinvention of Philosophy as Greek,” in *Cultural Readings of Imperialism: Edward Said and the Gravity of History*, edited by Keith Ansell-Pearson, Benita Parry and Judith Squires (London: Lawrence and Wishart, 1997) を参照。

(17) Jay L. Garfield and Bryan W. Van Norden, “If Philosophy Won’t Diversify, Let’s Call It What It Really Is,” *The Stone*, *The New York Times*, May 11, 2016, http://www.nytimes.com/2016/05/11/opinion/if-philosophy-wont-diversify-lets-call-it-what-it-really-is.html?emc=eta1&_r=1.

(18) フッサール、ハイデガー、パトチカ、およびデリダ

の言説を解釈しながら、「哲学」は本質的に「ヨーロッパ」と連結している概念である」と論じている最も精練な例のための一つは、Rodolphe Gasché, *Europe, or the Infinite Task: A Study of a Philosophical Concept* (Stanford: Stanford University Press, 2009) を参照。その批判のひとつとして、Bret W. Davis, “Gadfly of Continental Philosophy: On Robert Bernasconi’s Critique of Philosophical Eurocentrism,” *Comparative and Continental Philosophy* 9/2 (2017), pp. 121–23 を参照。

(㉑) Bryan W. Van Norden, *Taking Back Philosophy: A Multicultural Manifesto* (New York: Columbia University Press, 2017).

(㉒) アフリカ哲学の分野においてのいわゆる「民族哲学」(ethnophilosophy)をめぐる長年の議論については、D. A. Masolo, *African Philosophy in Search of Identity* (Bloomington: Indiana University Press, 1994) を参照。

(㉓) 日本人論と日本哲学の区別については、Yoko Arisaka, “The Controversial Cultural Identity of Japanese Philosophy,” in *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, pp. 75–779 を参照。

(㉔) Fujita Masakatsu, “The Significance of Japanese Philosophy,” translated by Bret W. Davis, *Journal of Japanese Philosophy* 1 (2013), pp. 5–20. 藤田正勝『哲学のヨハネ』(岩波書店、二〇一三年) 一—十六頁を参照。

(㉕) たとえば、Ben-Ami Scharfstein, *A Comparative History of World Philosophy: From the Upanishads to Kant* (Albany: State University of New York Press, 1998); *From Africa to Zen: An Invitation to World Philosophy*, edited by Robert C. Solomon and Kathleen Higgins (Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 2003); *Introduction to World Philosophy: A Multicultural Reader*, edited by Daniel Bonevac and Stephen Phillips (New York: Oxford University Press, 2009); *The Oxford Handbook of World Philosophy*, edited by Jay Garfield and William Edelglass (New York: Oxford University Press, 2011) を参照。

(㉖) Ueda Shizuteru, “Contributions to Dialogue with the Kyoto School,” translated by Bret W. Davis, in *Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School*, edited by Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason M. Wirth (Bloomington: Indiana University Press, 2011),

p. 21 を参照。

(52) Georg Misch, *The Dawn of Philosophy: A Philosophical Primer* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1951), p. 44.

(53) Wilhelm Dilthey, *Das Wesen der Philosophie, in Was ist Philosophie? Programmatische Texte von Platon bis Derrida*, herausgegeben von Rolf Elberfeld (Stuttgart: Reclam, 2006), S. 196–197.

(54) *A Companion to World Philosophies*, edited by Eliot Deutsch and Ron Bontekoe (Malden, MA: Blackwell Publishers, 1997); Ninian Smart, *World Philosophies* (New York: Routledge, 1999); また私が共編集している *World Philosophies* とびごシリーズ (http://www.iupress.indiana.edu/index.php?cPath=1037_3130_7338) などは単数形の「世界哲学」(world philosophy) ではなく複数形の「世界の諸哲学」(world philosophies) を使っている。

この論文のいくつかの部分は、「世界哲学のなかの日本哲学」という題名で『世界哲学としてのアジア思想』（東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、二〇一九年）

三十五—四十三頁に掲載されている。